the salamander in the circle

第二十八章

9かける3番目の王国

峯村　明

Salamander in the circle

第二十八章の登場人物		
ヒューダー	……	学術調査団の団員　民族・言語学者
イリチヤ	……	火精霊。ヒューダーが名付けた
マミヤ	……	ホシナ族の娘
バイスロイ	……	黄金門の皇帝の息子
シパド	……	アンベレオのメッサナ先遣隊長
レガリオ	……	アンベレオ王国の国王
ソラン	……	〃　祭祀長

これまでの主な登場人物

ネウトラ評議会	ハイヤーン	本部科学者のリーダー
	ティコ	科学者
	ナシル	本部・事務職員
	ダーヴェ	学術調査団の団長　上級賢者
	ヤスウ	〃　団員
エウメロス王国	レル・ヴァリス	王室付近衛隊長
	ヴァリス将軍	レルの父
	カール	王子　ヘルガの弟
	ロウナス	国務省の高官
	アンテロ	レルの副官
	摂政	亡国王の弟
	ヘルガ	王女
ケストル王国	パウル	国王
	ウルリク	第三王子
	ヘンリク	ウルリクの息子
	ホペオクー	ケストル人の美女
	ソルド	闘技場の警備隊長
黄金門市	皇帝	皇帝
	パソネル	バイスロイの参謀
冥界	冥界王	冥界の王
	ベネトナシュ	死神
	テクトリ	最下層ミクトランの主
	プラトニオ	メッサナを追放された化学者
世界の果ての島	ホシナ	ホシナ族の族長　マミヤの父
	オマキ	ホシナの妻
	キト・コマ	ホシナ族の男たち
	ゴン	ホシナ族の男　（ヤサカオ族出身）
	サノヒコ	王に仕える役人
	フツヌシ	王に仕える者　将軍
	ヤサカオ	ヤサカオ族の族長
	チドリ	アマセオの妻
	ハマツ	チドリの義父
	タマシギ	ハマツの実子
	オモイカネ	世界の果ての島の王に仕える者
	コタエ	〃
	スクナ	〃
	アマノカガセオ	シトリ族を去った兄弟
メッサナ市	パンテオラ	メッサナ市の総裁
	コモラ	総裁の顧問
	バラム＆バランケ	双子のジャガー　パンテオラの部下
	メルノ	音楽家
	バルダリス	メッサナ市総裁家の一人　総裁代理
	メンドルブ	メッサナの化学者

目次

9かける3番目の王国
429.
430.
431.
432.
433.
434.
435.
436.
437.
438.
439『9かける3番目の王国』
440.
441.
442.
第二十八章のあとがき
back number
奥付

9かける3番目の王国

429.

　メッサナ化学者団はアンベレオに屈した。さもなければ市街に火を放つと脅されては成す術もなかった。空も陸もメタ次元までも封鎖されている市街に放火されてはその結果は火を見るより明らかだった。

　メンドルプはアンベレオ先遣隊の言いなりになるほかなかった。
　先遣隊長シパドは『化学者の館』からメンドルプを追放し、館と化学者団を丸ごと手に入れることに成功した。

　この日。
　新総督、シパドが誕生したのである。

430.

シパドは得意の絶頂だった。なにしろ、世界最大の富を手に入れたのだから。

彼女の属するベレオーサ家は王家の傍系で、レガリオが王位に就く前からシパドは結婚相手の候補の一人だった。家柄、年齢、容姿いずれも申し分ないのだが、レガリオ本人が言を左右してなかなかうんと言わない。ありていにいって、彼女の冷淡なうえに激しやすい性格をレガリオが好まなかったからだが、縁談を断るよい口実はないかと考えあぐねていたところへ降ってわいたのが、メッサナ攻略であった。

シパド本人はメッサナは元々、我がベレオーサ家のものだと言っているが、はっきりいって、そんな事実はない。メッサナの繁栄を羨んだ一族の誰かが、「うちのものだったらどんなにいいだろう」とこぼしたのがきっかけとなって、「実はうちのものなのに」「メッサナ家はけしからん」とすり替わってしまった。
思いこみの激しいシパドは幼時からその話を聞かされて成長し、ついに、「メッサナ奪還はわが人生の使命なり」と思いこむに至ったのだった。

彼女は、メッサナを手に入れればレガリオと同等の立場に立てる、と思いこんだ。実際、メッサナは本家以上に繁栄していたのだから、そう思うのも無理はない。

そしてレガリオの父、先代王はそれを利用した。「彼女にメッサナを攻略させよう」先代王もシパドの性格を好いていなかった。あんな女に跡継ぎが生まれたらたまらんとさえ考えていたのだった。

なおかつ、「手に入れた暁には、統治を任せてしまえ」……そうすれば厄介払いができるというものだ！

シパドの方もレガリオのような優柔不断なやさ男はじつはタイプではなかったものだから、その青写真に飛びつき、レガリオもひそかに喜び、先代王も己の手腕にほくそ笑んだのだった。

431.

バイスロイは″神の代理人″のデッサンにかかりながら、別室での休憩の合間に楽団員からそんな話を聞きこんだ。

「では――メッサナでおこった一連のごたごたは、例の――」

「その通り、シパド姫のお指図さ。あんた外国人だから知らないだろうがあのお方はベレオーサ家の姫君だから、気をつけろよ」

「なにに気をつけろと？」

「お気に障ることがあるといきなり首が飛ぶ。本当にな」

「まさか」

「ウソじゃないって。メッサナの総督閣下もそれで」

「まさか！！」

「ほんとだって！　いいな、忠告したぞ」

　それが本当なら――メルノも？　――ボムソワール家も？　――あの女の一存で？

432.

「気が乗らないのですか？」

　いきなりモデルから声をかけられてバイスロイははっとし、楽団員たちはぎょっとした。

（つい考え事をしていた……）
　額の汗をぬぐい、けんめいに言い訳を考えるバイスロイである。
「その、なかなか難儀しております。もしかしたら、私には荷の重い仕事かもしれません」

「楽にしてください」、とモデルは言った。それから楽団に向かって、「あなたがたのお気に入りの曲はなんですか？　ぼくはそういうのが聴きたい」

　モデルはバイスロイも楽団も気乗りのしない仕事をしていたのを感じていたらしい。それでリラックスさせようということか。

　楽団長は戸惑いながらも、リクエストに応じようと団員たちに目配せした。それから指先でリズムをとり……流れ出した音楽は……

（これは……知ってる……よく知ってる）

友よ

友よ
ふたり丘を駈け

可憐なひなぎくを摘んだ日のことを覚えているか

ふたり小川で水をかけ合った日のことを覚えているか

あれは遠い昔の日々

もはや丘はなく
小川もなく
可憐なひなぎくは流された

荒海と時とがふたりを隔ててしまった

友よ

さまよう日々も失意の日々も
君を忘れたことはない

夕暮れのひなぎくを忘れたことはない

時は去り　時は来る

幸い君にあれ

友よ――

（※・1）第二十八章のあとがき参照

かつてメルノが得意にしていたレパートリーだ。

433.

（イリチヤ！？）

バイスロイは歌いながら描いた。モデルの表情が刻々変化していく。それは様々なレベルの苦悶の表情。重層化した苦悶。慟哭。描きながら手が震える。

（そういえば……彼はメッサナでメルノの歌を聴いたことがあるといっていた。この曲だったのか？）

　自分には聴き手の魂を揺さぶるような歌唱の才能はないとよく自覚しているバイスロイである。申し訳ないがこの楽団にしたところで同じだ。とすれば、この曲のせいだ。

　黒衣の肩の震えようはただ事ではなかった。バイスロイは思わずも画材を放り出して立ち上がり、モデルに駆け寄った。

「触らないでください」
　モデルは声を絞り出した。顔を背け、全身でバイスロイを拒絶していた。自分の手で両腕をきつくつかんでいる。その指に……

　バイスロイは声にださずにささやきかけた。

（指輪を、取り返したのだな）

434.

　別室で楽団長はバイスロイに懇願した。「モデルを刺激してしまったんでしょう！？　我々が！！　どうか、どうか内密に！！」

「いや、モデルは感激していただけだ」

「そ、それは光栄ですけれども、あの曲はまずかった！　あの曲は！　シパド姫がたいへん、その、嫌っておられて！」

「まさか、それできみらの首が飛ぶというんじゃないだろうな」

「そのまさかですってば！！」

「しかし、きみらのお気に入りなんだろう？」

　楽団長以下全員がうなずいた。

435.

　イリチヤの身に何が起こり、何故アンベレオ国王その人を差し置いてメッサナ奪還記念硬貨のおもてを飾ることになったのか、さすがに楽団員らが知るわけがなく、知る機会もなく、バイスロイはメッサナに戻された。

　といっても、自由の身になったわけではない。今度は『化学者の館』に軟禁状態となり、金貨の試作に取りかかることになった。彼が館に入った時はすでにメンドルプの姿はなく、アンベレオ兵が周囲を警戒していた。厳重に。

　モデルのデッサンだけで済むとはバイスロイも思っていなかったが、デッサンから型を起こす作業に移ると、
（ほかに人材はいないのか、本職が現れてもよさそうなものだ、私はちょっとばかり才能があるだけで、実は素人なんだぞ）
　にもかかわらず、衣も食も住も、気持ちが悪いほどの厚遇である。こうなると次第に疑いが頭をもたげてきた。

（生きてここを出られないかもしれん――）

　これだけの事業に加担してしまったのだ。おめおめと以前の生活に戻れると考える方がおめでたいというものだった。

　そんな矢先。彼の前に例の女が現れた。冷たく湿った隙間風のように。

「なかなか佳いものだ。男が額に汗して働く姿というのは」

　バイスロイは仕事に没頭するふりを装って女を無視した。女は上機嫌の様子で現れた

が今度は明らかに、むぅっ、とした雰囲気が漂ってくる。感情がストレートに伝わってくる。この女の特徴のひとつは、わかりやすい、ということだ、とバイスロイは考えた。

　やにわにシパドの朱赤のブーツをはいた長い脚が閃いた。バイスロイが覆いかぶさるように細かな作業をしていたテーブルを蹴りつけたのだ。

「なにをする！！」
　さすがのバイスロイも反射的に叫んだ。モデルの口元を彫りこんでいた彫刻刀の刃先が滑り、頬に傷がついてしまった。相手から三倍くらいの声量と熱量で反論が返ってきた。

「あたしを無視するからだ！！」

「私が今何をしているのかわかっているのか！？　おたくの国の金貨の基を造っているんだぞ！！　それももとはといえばあんたの口利きがあったからだ！！　　台無しにしたいのか！？」

「あたしを無視できると思うな！　きょうからあたしはこの地の新総督なのだ！」

　これほどうんざりする告白もなかった。この蛇のような若い女が？　新しい総督？

「よいか芸術家風情！　あたしは総督だ！　総督閣下と呼べ！！」

436.

「なんだその目は。文句があるのか？」

「いや……あんまり驚いたので……」

「みな驚いている。あたしくらいの年齢で総督に上り詰めた者はほかにいないからな」

　よりによってこんな自制のきかない小娘が。しかもこの小娘は簡単に決断を下す。気に入らない相手の首をいとも簡単に刎ね飛ばすという噂だ。えらいところに潜り込んでしまったとバイスロイは後悔し始めた。だがここでそう表明するわけにはいかない。緻密な作業を足蹴にされるくらいのことは、我慢しなければならないのだ。

　この時バイスロイは気がつかなかったが、シパドは総督就任の命を本国から受けたにもかかわらず、先遣隊の制服のままで『化学者の館』を、というより、バイスロイを訪れたのだった。

（とにかく――耐えろ）彼は自分に向かってそう言い聞かせた。成り行きとはいえ、王国の金貨に彫りこまれるモデルに接見し、金の供給元である『化学者の館』に軟禁されてしまったからには……（この女を怒らせぬ方がいい。その方がいい）
　頭でそう考えても性分はそう簡単に変えられるものではない。バイスロイは容易に他人に対して頭を下げられない人間だった。

「総督就任は喜ばしいことだが。私の仕事の邪魔をしないでもらいたい」（これで首を飛ばすならそうするがいい）

　はたしてシパドは……彼女の頬にさぁっと血の色が昇った。それは怒気か、それとも。
　彼女は頬を紅潮させ、無表情な目で言った。
「あたしの思った通りだ。バイスロイよ。そなた、ただものではないな」

「……」

「まあ、よい。金貨製造を最優先せよ」
　それだけ言うと踵を返そうとする。

「待たれよ！」

　呼び止められたシパドは横目で相手を見た。
「お聴きしたいのだが。総督閣下には、この金貨のモデルが国王陛下ではないことをご存知のはず」

「……」

「このモデルはいったいどういうお方か」

「……」

「ご存知なのだな？」

　シパドは表情のない目で相手を見返した。つくづく、蛇と見合っている気分に襲われるバイスロイである。

「よほど、知りたいようだが」

「ああ、知りたい。この美しい少年が何者なのか。芸術家の血が騒ぐのだ」

「このお方の素性など、芸術家に必要ないのでは？」

　思わぬ反論にバイスロイは息を呑んだ。この女を見くびっていた感があった。

「それとも？」シパドの目になんともいえない挑発的な色合いが浮かんでくるのを見て、彼は奥歯を食いしばった。

　この女を見くびっていた？　己はなんという甘い人間だ。

　考えられぬほど、シパドは下劣な女だったのだ。

437.

　それからしばらくの間、作業に邪魔が入らなかったのはシパドの配慮だったのかもしれない。それはそれでありがたいと思うバイスロイだったが、イリチヤのプロフィールを刻んだ純金の金貨を手にしてみると、とんでもないことに加担してしまったという実感が足を震わせた。

　金貨の片面は三角形の上半分がない、旧総督府の階段状ピラミッドのシルエット。あまりに堅牢な建物だったのでアンベレオは破壊をあきらめ、そのまま新総督府として使うことになった。金貨の円周にそって細い蛇がうねっている。もう片面は、少年のプロフィール。こちらの円周に蛇はいないが、かわりに文字が刻まれていた。

″ベレオーサ″、″今年の年号″、それから、″神の代理人″、と。

（これでは――イリチヤはベレオーサの支配者のように見える。それも、陰の支配者？　真の支配者？　どっちだ――）

　バイスロイは依頼された仕事をしたにすぎない。しかし……これでいいのか……イリチヤはこんなことを望んではいないはずだ……

「すばらしい出来だ」

「これは総督閣下……」

　今日のシパドはこまかくくひだを畳んだ半透明の、スリーブレス、膝まであるチュニックを身に着けていた。チュニックの下は真っ青な色のビスチュエ、チュニックと同じ純白の細いパンツがくるぶしまで覆い、装身具、サンダルもすべて金色に輝いている。痩身だが胸は高く張り出し、腰は細くしまっていた。

　その衣装は、バイスロイの目には酷薄さと攻撃性を強調しているように見えた。今までとは違う身なりについてなにか言わなければならなかったのだろうが、人格とはおそろしいものだという考えが先に浮かんでしまい、なにも言わないことにした。心にもないことを口にしなければならない義理はない。そこで、ただ、「恐れ入ります」とだけ返した。

　彼は金貨の弧を親指と人差し指とで固定し、宙にかざした。「しかし閣下、この金貨には何故、閣下、あるいは国王陛下のお姿がないのですか」
　シパドは目を光らせているだけ。
「私ひとりの疑問ではありません。この金貨を手にする者はみな、同じ思いにとらわれるにちがいありませんぞ」（さあ、答えてみよ。このプロフィールの持ち主が何者か）、とバイスロイは挑発の目を向ける。

　シパドは投げやりに口を開いた。「思わせておけばよい」、と。それだけだった。たいした問題ではないようだった。彼女はあきらかに別の問題に気を取られていた。

　廊下から、複数の女たちの声が聞こえた。「シパドさま、姫さま」「どちらへ行かれましたか」「針がついたままです。あぶのうございます、お戻りくださいませ」、と。シパドの衣装は仮縫い中のものだったのだ。

「金貨はこのデザインで量産に入る。そなたの役目は終わりだ。バイスロイ」

　それを聞いてもバイスロイは任務から開放されるとは思えなかった。別の、さらなる難題が待ち受けていると直感する。

「そなたの芸術家としての役目は終わりだ。明後日。新総督就任式が行われる。……そなたはあたしの隣に立つのだ」

「……どういうことだ？」

「あたしの隣に立つのだ。あたしの、夫として」

438.

「あたしの隣に立つのだ。あたしの、夫として」
　投げつけるように言い放ったシパドの頬がさぁっと紅潮する。赤面しているのだと気がついて、バイスロイはあっけにとられた。

「とつぜん――なにをおっしゃる――」

「とつぜんではない。初めてそなたを見た時から決めていた。あたしの夫はそなただ」

　勝手に決めるな！　と喉元まで出かかった。初めて会った時から。あれからシパドの頭の中に自分が置かれていたのだと思うと――

「光栄きわまるが……それは……できない」
（ケストルのホペオクーといい、どうして私にはこの手の女が寄ってくるんだ！？）

　断られる可能性を考えていなかったのか。みるみる吊り上がる目。壮絶な眺めだ。まったく彼女はわかりやすい人間だった。

「できるできないではない！　そなたはそうするのだ！！」

「お待ちください閣下。聞いてください。私はくにに妻がいるのです」

「妻――」

「自分で決めた妻が五人、それから家同士で決めた妻が五人。子どもはすでに二十人おりまして」

「————」

「妻は十人まで。それ以上は持てない。くにの法律でそう決まっているのです。違反すると、莫大な罰金が課せられる。家の全財産が没収されるのです。だから！　すなわち！　そもそも！　私はくにに帰らねばならないのです。妻や子どもらをいつまでも放ってはおけませんから」

　もちろんそれはその場しのぎの出まかせだったが、妻を十人まで持てるというのはケストルにそういう法律があったと思い出したからだ。しかしいまだ独身で浮いた噂ひとつない彼に、それが異様にプライドの高い若い娘をどう刺激するかまでは想像できなかった。

「なるほど？　くにの法律ときたか」

　踵を返し、ものもいわず部屋を出て行きながらシパドは考えていた。どこのくになのか、調べてやる、と。
　バイスロイの口から出た出まかせは、やがて大惨事を呼ぶことになる。

439 『9かける3番目の王国』

むかしむかし、9かける3番目の王国に、見目麗しい若い王さまがいました。王さまが領地をめぐって歩いているとき、ひとりのむすめに出会いました。
むすめは泣いていました。そのころ大雨が続き、川も湖もあふれ、山はくずれ、村がひとつ、水の底へ沈みました。おおぜいのひとや動物、たがやした畑、作物も沈みました。

むすめは沈んだ村を嘆き悲しんでいるのだと、王さまは思いました。むすめを慰めてやろうと思い、王さまは歌いました。

緑なす山々
国原は大海の中に安らい
奇しき動物の
海底に沈めるもの
再び輝かしい日の光のもとに持ち出され
人類はここに定住する
誰か知る
この詩の結論を

（※・2）第二十八章のあとがき参照

王さまはむすめを都へ連れてかえり、指輪をひとつ、与えました。それは王さまのきさきの証しでありました。

ふたりは力をあわせ、くにを治めました。平和な時代がながく続きました。

やがて、王さまにわるい魔女が近づきました。魔女は従順なふりをして王さまの話相手になり、そのうち政治にも口を出すようになりました。
魔女のおかげで王さまのくには栄えたのですが、じつは、魔女はおきさきのことが好きではありませんでした。自分より若く美しくかしこかったからです。
魔女は言葉たくみに、こっそりと、王さまにおきさきのわるくちを吹き込みました。

王さまが魔女の言葉に耳をかたむけていると知ったおきさきは深く失望し、とうとう王さまにお別れを告げました。王さまは聞き入れ、きさきの証しである指輪を持って行くように言いました。おきさきは拒みましたが、王さまは今度は聞き入れませんでした。

おきさきが出て行ったと知った魔女がおおよろこびしたことは言うまでもありません。

きさきの位を無くしたむすめは、ある貧しい村に立ち寄りました。そこは王さまの領地のはずれ、やせた土地で作物は育たず、人々は重い税金に苦しんでいました。むすめは村おさに指輪を渡し、お金に替えるよういいました。そして、土地を生かし、人を育てるよう、助言したのです。

人々はたちあがり、むすめはやがて村を去りました。
そしてお金に替えたはずの指輪はどこからともなく村に帰ってきて、村でいちばん貧しい者の手に渡りました。
お金に替えたはずなのに、また戻ってくる。またお金に替える。戻ってくる。そんなことが幾度も繰り返され、いつしか、指輪は、『神からくだされた』という意味の、『オリカルクム』の指輪、と呼ばれるようになりました。それは金色と緑色とが交わらずに揺らめく、世にも美しい指輪だったということです。

440.

「メッサナ家が痩せた土地を造り替えたという話は聞いたことがあります……」

「ええ、でも、この昔話はメッサナ家勃興をもとに作られたものかもしれませんわ。陛下」

「叔母上。9かける3番目とは、なにか意味があるのでしょうか」

「さあ。とても遠いことを表現する慣用表現だということしか」

「遠い？」

「たぶん、時間的に」

　レガリオはちょっと笑った。「そう、我がアンベレオ王家の歴史上にも、こんな話はありませんからね。もっと遠い時間の、我々が知らない王国。しかし。まさか『オリカルクムの指輪』が実在するとは」

　王家の秘宝中の秘宝、あの肖像画に描かれた女がつけていたのは、まさにその指輪の特徴を持っていた。

＊

レガリオ王とソラン祭祀長がそんな会話をしているころ、偶然にも、パルダリス邸の図書室でヒューダーは『9かける3番目の王国』を読んでいた。彼もまた、イリチヤがヘルガ王女からもらったという指輪のことが気になっていた。ヘルガは、父エウメロス王がメッサナで芸術家を支援するために買い取ったものを譲り受けた、と言っていた。

ヒューダーは喉がカラカラになる思いで古い本を閉じた。イリチヤがつけていたのは、まさに『9かける3番目の王国』にさりげなく描かれた指輪の特徴を持っていたのだ。

441.

マミヤのホシナ族には本を読むという文化はない。だから図書館なる場所で書物に囲まれ調べ物をするヒューダーの姿はもの珍しくてたまらなかった。

だが好奇心旺盛なマミヤもヒューダーの深刻な表情には気がついた。それでも好奇心は抑えきれない、話はしたい。おそるおそる、そおっと、聞いてみる。

「あのー、なにをしているの？　なにを読んでいるの？」

「ああ。昔話を読んでいたんだ」

「……むずかしいお話？」

「むかしあるところに、立派な王さまと美しいむすめがいた、そういう話だ。べつにむずかしい話じゃない。そうだ、読んでやろう」

こうしてマミヤは『9かける3番目の王国』の物語をヒューダーの口から聞かされた。

＊

読み終え、本を閉じると、マミヤは物語の世界に浸ってしまってぼうっとし、ヒューダーもなんとなくうわの空だ。

「この話はいくつもヴァージョンがあるんだ。細かい所が微妙にちがう話になっているんだな。ということは、とても古い話で、人から人へ、口伝えに伝えられてきたということだ。どの話がウソで、どの話が本当か、それはわからないし、問題じゃない。人によって受け取ったものがちがうというだけだ」

マミヤはヒューダーの″解説″も耳に入っていないようだったが、しばらくしてから口を開いた。

「ね、わるい魔女が出てきて、王さまにおきさきのわるくちを吹き込んだ、っていうとこがあるでしょ？　いったいどんなわるくちを言ったのかしら？」

（そこか？）、と思いつつ、ヒューダーは言葉をさがす。
「いま読んだのはこどもむけに書き直されたもので、こどもには刺激が強いだろうと思われる部分はぼかしてあったり、省略してあったりする。昔話のおもしろいところだ。

魔女が王さまに何を吹き込んだのか。別の、もっと古いヴァージョンにはこうある。

――王にはかつてきさきが幾人もいたが、いずれもこどもに恵まれなかった。新しいおきさきを陥れたい魔女は、そのことに目をつけた。そこで、宮廷中に言いふらした。曰く、『おきさきは城の外で浮気をしている』、さらに、『おきさきは浮気相手の子を

産んだ』
　多くの廷臣たちがそのうわさを聞き、ついに王の耳にも入った。
　王はうわさの存在自体に驚き、恥じ、きさきに決断をせまった。きさきは自ら城を出て行った――　」

　マミヤは憤慨して言った。「ひどい！！」

　ヒューダーはできるだけ、おだやかに言った。「どこがひどいと思うんだ？」、と。

「だって！　ただのうわさでしょう？　王さまはうわさを信じたってことでしょう！？　おきさきじゃなくて！」

「根も葉もないうわさではなかったかもしれん、そういう可能性もある。つまり、きさきは本当にこどもを産んだのかもしれない」

　マミヤは絶句してしまい、ヒューダーは続けた。

「そして……そのこどもは浮気相手の子ではなくて、王のこどもだったのかもしれない。だからきさきは、妻である自分を信じなかった王にがっかりしたんだ……」

「だとしたら、こどもは本当に産まれたのね？　その子はどうなったの？」

「祝福されなかった、ということだろう」

「昔話というのは、じっさいあったことかもしれないし、ただのたとえ話かもしれなければ、まったくの作り話かもしれない。何が本当で、何が本当でなかったか、わからない。
しかし……この『9かける3番目の王国』物語は、いくつものヴァージョンや、無関係に思われる昔話を重ねてみると、見えてくるものがある。
これはおそろしく遠い時代に行われた、それも神に祝福されなかった結婚だということだ」

　ヒューダーの冷静な″解説″をよそに、マミヤはぼろぼろと涙をこぼした。

「祝福されなかったなんて、そんな、あんまりだわ！　神さまって人でなしよ！！　こどもになんの罪があるっていうのよぉ！！」

第二十八章『9かける3番目の王国』
第二十九章へ続く

第二十八章のあとがき

#415（※・1）　Auld Lang Syne『蛍の光』　またの名を『レムリア最期の日』

#422（※・2）　『日本列島の誕生』・平　朝彦(著)より　Heinrich Edmund Naumann 訳・桜井国隆

第六部にはいったとたん、思いがけない方向へ転がりだした感が…どうなるんだろう…

今回のサブタイトル『9かける3番目の王国』とは。
多くのロシアの民話は、「昔々、9かける3番目（＝27番目）の王国で…」と始まります。この伝統的な始まりは、ふつうは、単に「非常に遠い」という意味。また、民話の主人公が、本当に遠くへ旅するとき、彼は「9の3倍の国々」を越えたといいます。あるいは、スラヴ人の死後の世界のイメージ。
ちなみに、「9の3倍」は、スラヴの数え方ではありません。古代ロシアの算数では、別の数字を使いました。
https://jp.rbth.com/arts/85819-roshia-shinwa-densetsu-hikyou-5

というわけで、「9の3倍」は、民話における造語にすぎない、というのですが、ほんとかな。なにか意味があるように思えます。
こどもの言葉遊び『イーニー　ミーニー　ミンニイ　モー』は、魔術の荘重な呪文からきているといいますしね。

2023年11月26日　記

back number

第一部

『第一章　世界の果ての島』
はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。しかし、黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可によるものだった。
ある日、ホシナ族のもとにふたりの異国人がやって来た。ネウトラ評議会・学術調査団を名乗る彼らの目的は、絶滅危惧種である巨人族の調査だった。

『第二章　破滅の襲来』
調査行の最中に調査団長・ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤの行方がわからなくなる。やはり行方不明の巨人と同様、何者かに拉致されたと考えた調査団メンバーのヒューダーとヤスウは島を後にし、ダーヴェたちの痕跡を追う。航行中の彼らは緊急事態信号をとらえ、発信元のエウメロス王国へ急行する。

『第三章　変態』
エウメロス王国を襲った巨人族はどこから来たのか。ヒューダーはエウメロスのレルを伴って隣国ケストル王国へ。両国の国境をなす険しい山脈のふもとに作られていたのは王家の離宮と闘技場。ひとりの少年を密入国させたかどで、ヒューダーは闘技場に引き出される羽目に。決闘の相手は当の少年。この闘技場が巨人族のホームだと直感したヒューダーだったが、己がイリチヤ（槍）と名付けた少年に倒されてしまう。
※・サブタイトルについて。
オタマジャクシがカエルに、イモムシが蝶に形態が変わるという意味での『変態』です。別の意味ではありません

『第四章　レムリアン・ラプソディ』
ケストルの闘技場でマミヤから渡されたダーヴェの眼鏡には、夥しい量の情報が納められていたことがわかる。それは巨人族の遠い祖先の濃密な記録だった。マミヤに眼鏡を託したダーヴェは南へと向かったらしい。世界の果ての島で仕切りなおしたヒューダーたちは、マミヤ、ヘルガ王女、ダーヴェの探索、そして巨人族の襲撃に遭ったネウトラ評議会本部へ向けて、それぞれ旅立つことになる。

第二部

『第五章　メッサナ』
エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……

一方、ヒューダーはイリチヤを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

『第六章　脱走巨人』
ヘルガ王女を乗せたエウメロス機はケストル機に襲われる。コタエと駆けつけたイリチヤとによって全員エウメロス領側に助け出されるが、そこには巨人が待っていた。コタエたちに襲いかかろうとする巨人をイリチヤが阻止するが、それはエウメロスの首都へ派遣された増援部隊から脱落した者だった。搭乗機を破壊され、国境付近の険しい高山にとり残されて身動きできない一行はそこで一夜を明かすことになる。そして夜半。レルはコタエに異変が起こっていることに気づく。

『第七章　メッサナからの逃亡』
知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。悪意に満ちた激しい攻撃を見かねた人々は彼女を助けようと進んで支援するが、メッサナ郊外でメルノはひとり放置されてしまう。後戻りもできず湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。
同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を発ってメッサナを目指していた。

『第八章　IRITIYA』
人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々とを恐怖に陥れようと画策していたのだった。メルノは死んだと報告するベネトナシュ。だが冥界の王はひそかにそれを疑う。
一方、イリチヤとマミヤとは、エウメロスの首都へ向かうレルらと別れ、メッサナ市を目指す。が、メッサナ総督府には異変が起こっていた。イリチヤは外部の隠れ家に潜んでいたコモラを探し出し、パンテオラ総督がアンベレオ本国の兵士に連れ去られたことを知る。

『第九章　原子の火』
のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理を務めることになったパルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナが抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。
メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。
2011年の原発事故を踏まえた『火精霊に聴く　-原子の火に関する一問一答-』を収録しました。

『第十章　二極世界』
死神はメッサナの金脈がアンベレオの手に渡ることを好まない。その思惑は、アンベレオ王家とメッサナ総督家との全面的対立へと向かわせる。それは多くの物資をアンベレオ王国に依存する諸国と、知と美をメッサナから持ち帰った各国の人材たちとの対立へと発展する様相を見せていた。また、メッサナ化学者集団は巨人族対応を巡ってネウトラ評議会と対立する。

ヒューダーの要請に応じるイリチヤの旅立ちをひとりで見送るヤスウ。
並外れた知と美の都の凋落が、ヤスウの目の前で始まろうとしていた。

第三部

『第十一章　天津甕星』

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。
ホシナ族と交わるうちに美しい青緑色の幻獣を見かけ、ますますホシナの地に惹かれるアマセオだった。
そんな中、アマセオの実家の使者がやってくる。使者が持ってきた知らせは、アマセオの妻に子どもが生まれたというものだった。族長夫人のオマキは大喜びするが、アマセオは激しく動揺する。生まれた子は三つ子。アマセオ自身も三つ子だった。それは生まれてはならない者だったからだ。

『第十二章　機織り族の野望』

王に献上された見事な織物。かつて王の正后に贈られた腹帯と同じ材質のものに見えたオモイカネは、それに触れたとたん、激烈な反応を体験する。現政権の日読みを司る彼は、王に危害が及ぶ懸念からその織物を預かる。
一方、赤子と妻に会うため、帰郷したアマセオ。故郷は鳥を守護神とする神聖な織物の郷。妻の兄、タマシギと語り合ううち、タマシギが一族の持つ織物の権利の維持と織物の技術開発に並々ならぬ意欲を持っていることを知る。家を追い出され、家業に興味のないアマセオだったが、タマシギに対して違和感を覚える。そんななか、アマセオの子が怪鳥にさらわれる事件が起きた。

『第十三章　アマセオとカガセオ』

鳥の化け物がシトリを襲い、三つ子を連れ去った。三つ子の父親・アマセオは化け物を追う。
シトリ一門の将来について、追放同然とはいえ嫡男であるアマセオと考えが食い違うことに気づいたタマシギは、この事実を即刻政庁に報告する。
報告を受けたフツヌシは、アマセオがかねてよりホシナ族と接近していることを懸念していた。
この国の仕組みは北極星を中心としている。一方、はるか過去に石器と狩りの技法と共に北からやって来たホシナ族は金星に導かれていたからだ。しかしこの国にとってホシナ族はなくてはならない存在であることがフツヌシを悩ませる。
アマセオの子をさらったのは、出生後に殺されたはずのアマセオの弟だった。弟はシトリの後継者であるアマセオの力になるべく、殺された後タマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。
ところが、タマシギの目的のためには手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

『第十四章　ヤサカオ　立つ』

ホシナ族の黒曜石事業拡大は政府から仕掛けられた罠だった。権利の拡大解釈を理由に、政権の軍部を司るフツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。フツヌシはまた、アマセオを陥れる訴えをもタマシギから受けていた。

夜陰に紛れてホシナ族の地を訪問したスクナは、アマセオにすぐにこの地を離れるよう進言する。フツヌシの狙いを攪乱するためだった。そしてスクナは、タマシギに憑依したカラスの正体を知る。ミツハの中のメルノは言う。それは死神だと。
死神の登場に動揺したメルノはホシナ族を抜けようと考えるが、スクナから厳しい叱責を受けるのだった。

一方、アマセオと懇意の仲のヤサカオは、ひとつ問題を抱えていた。ホシナ族を存続の危機に陥れ、ホシナの娘マミヤ失踪のもととなった事件を起こしたゴンはヤサカオの息子だった。族長ホシナがゴンをホシナ族の者として扱ったため、ヤサカオの名は表沙汰にならなかったのだ。そのことを恩義と受け取ったヤサカオは、ホシナ族にかわってフツヌシを迎え撃つ。

『第十五章　ふたつの北極星』
かつて名を奪われ、取り上げられたわが子が意外にも近くにいると知ったミツハは彼女本来の力を取り戻し、カラス−死神と対決する決意を固める。
一方、フツヌシの軍団のひとつが農村を襲って村人を人質にホシナ族に投降を迫り、ホシナの郷をも襲おうと謀る。ホシナ族はもはや退路は断たれたと知り、そのやり方にアマセオは失望と怒りを覚え、フツヌシ、オモイカネに政府の真意を問いただす。
オモイカネは、現王の後継者を巡って政府内で陰謀が渦巻いていることを語る。王と深い関係にあるホシナ族は陰謀の犠牲になり、ヤサカオ族と共にフツヌシを負かしたアマセオは王位を巡る者にとって脅威的な存在になっていたのだった。
はたして、ホシナ族とアマセオの行方は。

第四部

『第十六章　トゥランの七つの洞窟』
冥界王に無断で世界の果ての島に手を出した死神は冥界王の怒りを買い、ついに見放される。
一方、ケストルの追撃を逃れた王女ヘルガはついに故国に帰還。信用のおける側近らと情報を交わすうち、ネウトラ評議会が巨人族の襲撃を受けて壊滅状態であること、また、メッサナ市に異変が起こり、封鎖されたことがわかる。そんななか、エウメロスの地下シェルターに逃れてきた黄金門市の皇帝は、エウメロスの生存者全員を地下シェルターに収容し、ひとつしかない入り口を塞ぐことを提案する。大陸の下には遠い過去に造られた巨大な都市があり、エウメロスの地下シェルターはその都市から伸びた枝道のひとつだった。皇帝の一族は驚異的な力をふるって地下道掘削に取りかかる。

『第十七章　ブルー・マーキュリー遭難』
巨人族を殲滅させるべく原子炉製造に意欲を燃やすティコ博士に頼もしい協力者が現れた。評議会西支部のコパーン博士である。メッサナ化学者団と決裂してしまったティコは、コパーンの進言を取り入れ、原子炉から原子爆弾へと舵を切っていく。その様子を耳にした黄金門の皇帝は、評議会には専門家がいないのだと見抜く。いずれにしても地下へ潜ってしまったエウメロスには無関係なことだと思われた。ところが事態は急変する。コパーンがティコへ送った無人偵察機が行方不明になった。偵察機は爆弾の製造仕上げに使うブルー・マーキュリーという素材を掲載したまま、ケストル北方、氷河地帯でコントロール不能になったのである。ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっているバイスロイ救出に動き出す。

『第十八章　王女の冒険』
ケストル王国に向かったスクナとヘルガは、途中、アマセオと出会う。彼はホシナ族と行動を共にしてきたが、ホシナ族が安全な場所で逗留中、単独行動をしていたのだった。スクナらが大任を負っているのを知り、アマセオはケストル北方へと偵察にむかう。
ケストル王パウルと対峙し、国民らに避難を呼びかけたヘルガはバイスロイが王都にいないことを知る。彼は離宮へ招待されていたのだった。ヘルガにはおぞましい記憶の残る場所だったが、バイスロイ救出に急行する。しかし王都よりずっと北にある離宮は決壊した氷河に呑まれようとしていた。

『第十九章　ミクトランへの道』
ケストル闘技場からエウメロス地下シェルターへ移されたアマセオ。レル・ヴァリスは彼自身が保管していた闘技場の見取り図とアマセオが持ってきた情報が一致していること、そしてかつてダーヴェのメガネを解析したコタエの記憶から、ケストル闘技場には巨人族が出入りしていた機構があることに気づく。一方、破壊されつつある闘技場地下にある渦に飛び込んだバイスロイらはどことも知れぬ場所に到達。バイスロイは到達地の特徴から、それが太古に失われた転送システムであると知る。

第五部

『第二十章　冥界の巨人』
バイスロイ一行を出迎えたのは、ネウトラ評議会のダーヴェ。ダーヴェはケストル闘技場から転送システムを使ってミクトランへ来たのだった。同じ方法で多くのケストル人がミクトランにやって来ていた。いくつもの事情で母国へ帰れなくなったケストル人は、ダーヴェらをつけ狙った。彼らは、転送システムのパスの機能をもつ『評議会の身分証』をもたらした人間、ヒューダーをも恨んでいたのである。地上帰還の可能性がきわめて低いなか、ダーヴェたちは最大の謎、巨人族がどこからやってくるのかを解こうとしていた。

『第二十一章　メッサナの黄金郷』
ヒューダーとスクナとはホシナの郷について、イリチヤについて情報を交換し合う。スクナはその見た目からメッサナからの逃亡者メルノはイリチヤの身内ではないかと考えていた。しかしヒューダーは納得できない。メッサナ人とイリチヤとでは外見の特徴が違い過ぎるからだ。
かつてメルノは、その名の者は死んだとし、偽名として自らミツハと名乗った。そのことを知ったヒューダーは、『ミツハ』とは水の精霊を表す音であると気がつく。古い伝説によればイリチヤの母親は水の精霊である。
一方、メッサナ滞在中のヤスウとマミヤは総督代理パルダリスのもとに身を寄せていた。そこへメッサナの本家アンベレオの王、行幸の通達が届く。それは国王の行幸完了まで現在メッサナ市にいる者はその場を動いてはならないという命令でもあった。

『第二十二章　物質化した太陽光線』
黄金の力とは世界を清浄し、活性化させるもの。その働きは太陽と同質である。誰もが受け取ることのできる太陽光線と同様に、人は誰も黄金を受け取り、その浄化と活性化エネルギーによってより偉大な存在へと上昇する……
しかし黄金時代を象徴するメッサナ市は、音楽生迫害事件をきっかけに内側から崩れ、メッサナ市の

本家アンベレオ王国の植民地では黄金が高騰を始めた。
いまだ対処の手がかりもつかめない巨人族問題と相まって、世界は混迷を深める。

『第二十三章　ミクトラン脱出』
ケストル人ソルドらがミクトランを去った。時と場所を選ばなければ脱出は可能なのだが、ただ、計り知れない危険を意味していた。そのために、スクナの脱出計画をダーヴェは強硬に反対する。しかしヒューダーは絶対に安全な道などないと言い、反対するダーヴェを牽制する。そしてスクナともう一名の枠に、バイスロイはヘルガを推す。彼はメッサナの音楽生迫害事件の被害者たちはかつて親交を結んだ者たちだと知り、物理的にメッサナに最も近い場所であるミクトランに残ることを選んだのだった。
ミクトランの怪物の群れが大挙して押し寄せるなかを、スクナとヘルガは脱出を決行する。

『第二十四章　トーラの鷺の園』
ヘルガはアマノカガセオによって大陸中南部の森林地帯へといざなわれる。陸上からはとうていたどり着けない険しい地形のなかに現れた湖に浮かぶ島・トーラで、ヘルガは去る大災害の直前にケストル宮廷から退避したはずの家臣たちと再会する。そこは掘削中の地下道がいずれ到達する地、出口でもあった。
一方、ミクトランに残った一行の巨人族探索は遅々として進まず、仮面の怪物の執拗な攻撃に手を焼いていた。怪物群の攻撃を一手に引き受けているイリチヤに、戦いを宿命づけたかのような名づけをしたことにヒューダーは責任を感じていた。

『第二十五章　イリチヤの行方』
ヘルガからの贈り物である指輪を追ったイリチヤは死神ベネトナシュの手に落ちた。しかし、ミクトランの主・テクトリが横取りする。わけもわからず嘲弄されるイリチヤだが、巨人族が造られる現場をついに目にする。そこはミクトランの中に作られた異次元空間で、製作者はメッサナを追放された化学者プラトニオ。評議会の爆弾が巨人族を殲滅すると同時に地上のあらゆるものを汚染したことがわかると、テクトリもプラトニオも慄く。評議会の爆弾とは、メッサナが封印していたきわめて危険なものだったのだ。そんな彼らの前に現れた男が巨人族製造を弾劾したことによって巨人族問題は集結しそうにみえたが、地上を汚染したのが地上の人間であると知ったイリチヤは激しく落胆する。

第六部
『第二十六章　ジャガー狩り』
ミクトランで行われていた巨人族製造はある人物の一声で打ち切られた。ミクトランは冥界から切り離され、ダーヴェたち三名はイリチヤの懇願により地上のメッサナへと送られた。巨人族の危機が無くなり、ミクトランを脱出できたことよりも、その急転直下の転換ぶりに三名は戸惑う。なによりイリチヤが謎の人物に連れ去られてしまった。彼らは敗北感と無力感とに苛まれる。
メッサナの前の提督パンテオラを飼い主としていたジャガーのバラムとバランケもあるじを失った現実に直面し、失調し始める。そんな折、メッサナ中のジャガーがすべて集められ、くにが管理するという通達が発表された。

『第二十七章　仮面の神』
黄金門の後継者バイスロイは身分を隠したままメッサナの街中に出、メルノの生家跡でアンベレオの女先遣隊長シパドと出会う。バイスロイが彫刻を得意とする芸術家だという話を真に受けたシパドは、彼に記念硬貨を造らせるため、アンベレオ王都へと送る。ヒューダーたちは出かけたまま戻らないバイスロイを心配するが…
メッサナ市奪還に湧き返る王都だったが、王場内には緊張が走っていた。アンベレオが信奉する神が、その代理人を送り込んできたのだ。そして記念硬貨に彫られるべき人物は、国王から神の代理人へと変更になった。
バイスロイはモデルである神の代理人と対面する。

奥付

Salamander in the circle
　第二十八章　9かける3番目の王国
2023年11月30日 初版発行
著者　　峯村　明　E-mail　blog　D & R
表紙素材　「月とサカナ」
制作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社